

1. 単元名 器械運動「マット運動」(前転・後転)
2. 研究主題との関連

「身体と対話する学び」で考える子どもを育てる授業づくりⅡ
～評価活動で深まる学び合いをもとに動きが高まる授業～

(1) 単元について

3年生の子どもたちは、昨年度までにマットを使った運動遊びを通して、さまざまな転がり遊びを体験し、また、手や背中で体を支持し、逆さになる感覚を味わいながら遊んできています。友だちと動きをシンクロさせながら遊んだり、動きの見合いやコツの教え合いを重ねたりしてきたことで、「この動きの時は手をこうつけばいいんだ。」や「足の蹴り方の注意点はこうだね。」といった具体的な動きにつながる理解は深まってきている。しかし、個々の子どものこれまでの運動経験や体力的な差異からか、動きの習得や動きの質に差ができており、その差からマット運動に対する意欲の差となってきた。その結果、“できないから嫌い、だからやりたくない”といった消極的な姿勢で運動に取り組む子どもの姿も見られる。

器械運動の中でもマット運動は、座る・寝ころぶ・這うなどの基本的で日常生活に近い動きからつながる運動で、誰でも取り組みやすいものである。また、できる、できないが明確で、到達点が見えやすい単元であり、より困難な条件下でできるようになったり雄大で美しい技ができるようになったりする楽しさや喜びを味わいやすい単元でもある。そこで本単元では、1人1人が課題をもって工夫しながら取り組み、仲間同士で互いに励まし合いながら、助け合い、教え合って学習を進めていくようにする。また、どのような動きになればめあてに到達したのかのゴールを明確にし、それをもとに相互評価をすることで、アドバイスや声掛けが適切に行えるようにする。

学習にあたっては、子どもが十分にマット運動になじむことができるように、課題となる動きにつながる簡単な動きやゲームから取り組み、全員が動き喜びを感じられるようにする。さらに、個々で習得したい技に向かうまでのスモールステップを明確し、子どもの技能に合った技や練習法を提示して、自分に合った動き、自分に合った練習を主体的に選択して取り組めるようにする。さらに、グループ活動でのお互いの動きの見合い、話し合いを通してコツの共有を図り、動きを言葉にすることで動きへの理解を深め、聞いた言葉を動きにかえることで、新たなコツ、動きへの意欲を高められるようにしていきたい。

(2) 単元の目標

- 【学ぶ態度】運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動したり、場や器械・器具の安全に気をつけたりすることができるようにする。
- 【思考・判断】自己の能力に適した課題をもち、技ができるようになるための活動を工夫することができるようにする。
- 【技能】マット運動の楽しさや喜びに触れ、その技ができるようにする。
 - ・基本的な回転技(前転・後転)をできるようにすること。

(3) 授業構成の仮説

① 子どもの育ちを生かした活動構成

本単元では、今回は前転・後転のもととなる動きを意識した準備の運動を感覚づくりの運動として積極的に取り入れ、子どもたちをマット運動へと向かわせたい。すなわち、「腕で体を支持する動き」「腰を頭よりも高く上げる動き」「体が順に接触していく動き(順次接触の感覚)」につながる動きをゲーム化したり、競争の要素を取り入れたりして、子どもたちが自然に運動に取り組み、もととなる動きを身につけられるようにしたい。

② 身体と対話をする学びをうながす指導者のはたらきかけ

子どもたちが行う動きを、子どもたち自身がしっかりイメージできるように働きかける。目指すべき動きを、イラストや写真、映像等で子どもたちに示し、子どもたちが目指すべき動きのイメージをはっきりと持ち運動に取り組めるようにする。友だち同士での動き見合いを積極的に行い、動きの中で見つけたことや気付いたことを、分かりやすい言葉を用いて互いに交流し、評価し合うことで、よい動きやイメージ、動きのコツを共有し、それを自分の動きに取り入れて、よりよい動き、洗練された動きへと取り組めるようにしたい。